

史跡 彦根藩主井伊家墓所（清凉寺墓所）

清凉寺について

祥寿山清凉寺は、彦根城下の東、佐和山の西麓に位置し、近くには龍潭寺や大洞弁財天堂など、井伊家にゆかりの深い寺院が堂宇を連ねています。

清凉寺は、慶長7年（1602）、彦根藩初代井伊直政の死去により、その墓所として創建されました。「祥寿」の山号、「清凉」の寺号は、ともに直政の院号と道号「祥寿院殿清凉泰安大居士」に由来しています。清凉寺は当初、井伊家旧領の上野国上後閑（こうずけのくにかみごかん・群馬県安中市）にあった曹洞宗長源寺の末寺でしたが、寛永8年（1631）、二代藩主直孝が上野国箕輪（みのわ）から高僧愚明正察（ぐみょうしょうさつ）を招いて開山とし、明暦2年（1656）正察退隱のとき本末関係を改め、同国雙林寺（そうりんじ）末となりました。この頃には清凉寺の寺観もほぼ整い、幾多の修行僧が集って隆盛期を迎えることになり、以後、井伊家歴代の菩提寺として法灯を継いでいくことになるのです。

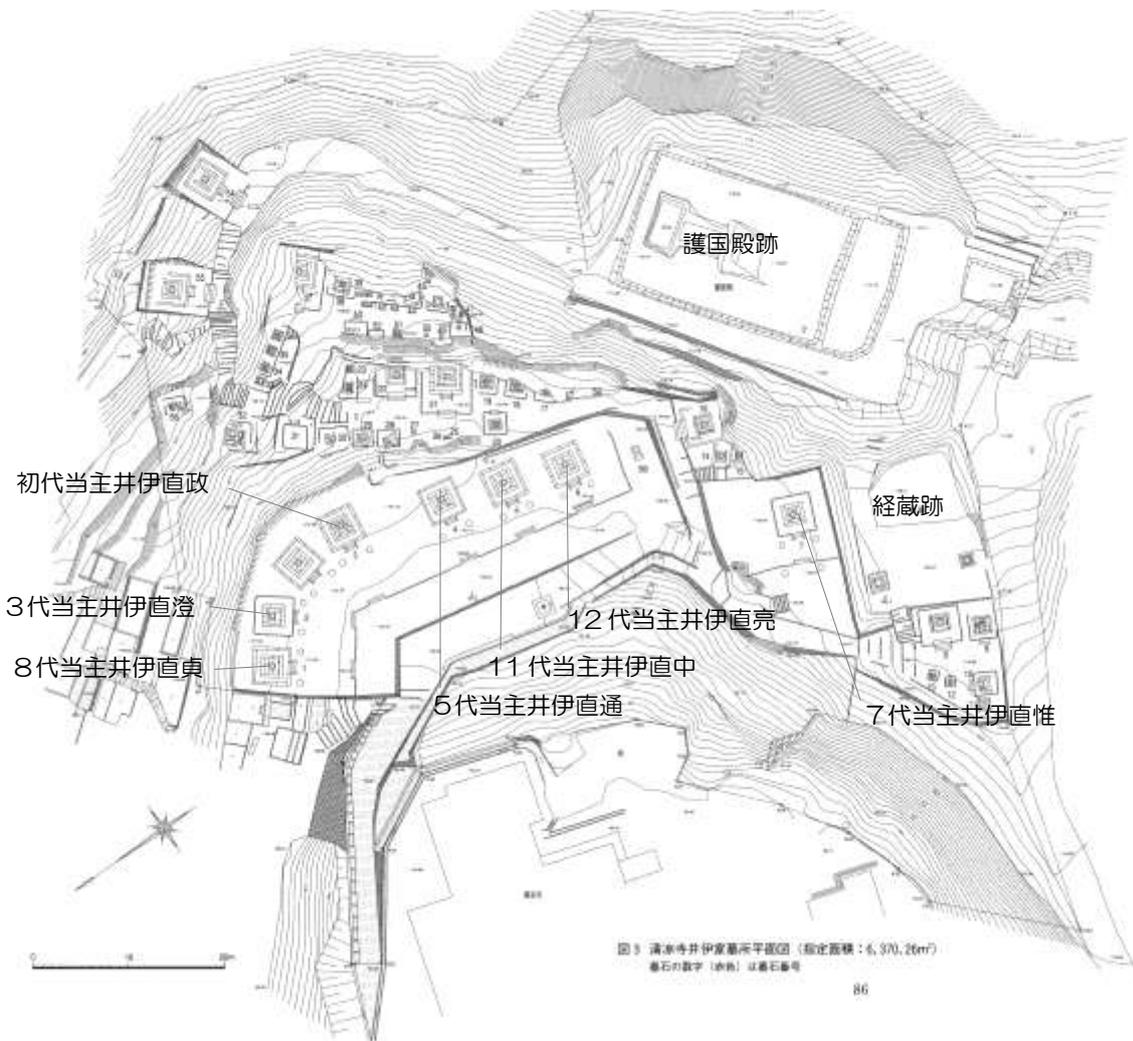
墓所について

清凉寺の井伊家墓所は、清凉寺の寺域の最も奥まった本堂の裏手に位置しています。山麓を石垣で段状に整えて墓所とし、手前に歴代藩主の墓石7基を連ね、その南側と奥には正室や側室など14基、子息や子女など35基、そして該当者不明の3基が大小連なっています。墓石の合計は59基で、その墓石形状は、藩主の7基をはじめ17基が無縫塔形、位牌形が37基、五輪塔形が3基、そして舟形と宝篋印塔形が各1基という内訳になります。供養塔は、改易されて井伊直孝預かりとなった元小田原藩主大久保忠隣（おおくぼただちか）のものです。

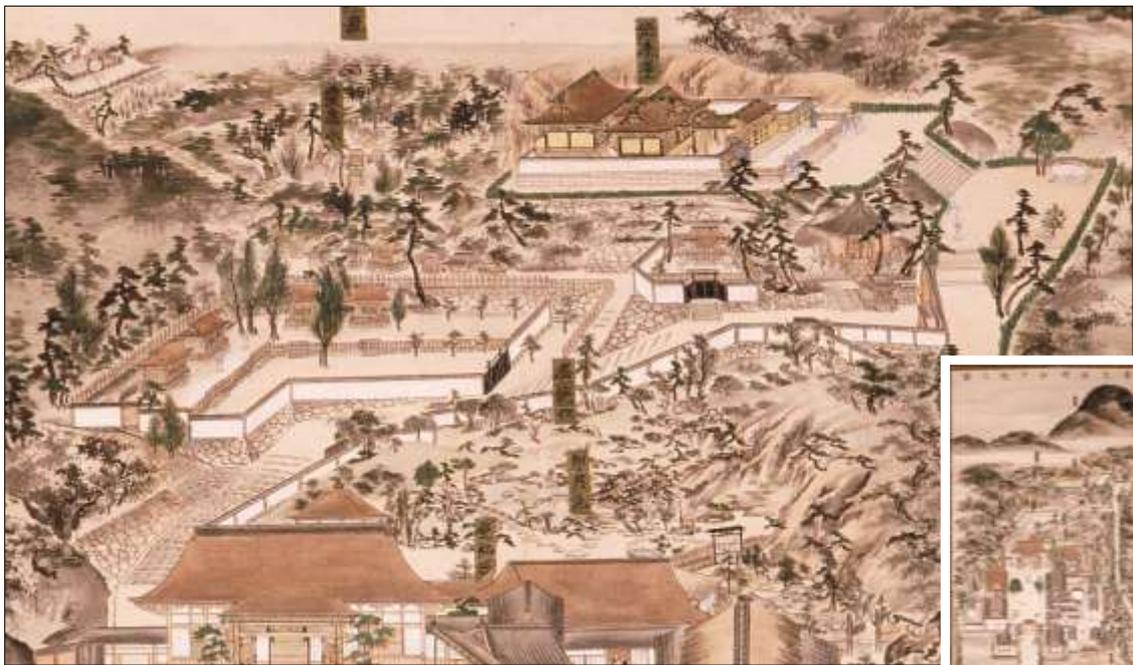
これらの墓石は、幕末に描かれた清凉寺御廟所絵図によると白漆喰の瓦塀や柵で区画され、各墓石を御霊屋で保護されている状況が確認できます。経堂は当所に存在していませんが、埼玉県所沢市に移築され現存しています。護国殿は、初代直政と2代直孝の霊を祀るため、11代直中が建立した建物です。建物の痕跡は明瞭に残っていますが、建物そのものは、やはり昭和35年に福井県敦賀市栄新町の天満神社に移築されています。

井伊家は国許である彦根の清凉寺と江戸世田谷の豪徳寺を護持し、歴代の当主以下、正室・側室、子息・子女ら井伊家一族の多くがこの2箇所の墓所に埋葬されました。4代当主直興については、仏教への信仰心が篤く、永源寺の南嶺慧詢に深く帰依したため、側室とともに永源寺を墓所としており、例外となっています。このように墓所が大きく国許と江戸に二分されているのは、参勤交代の制度の下に国許と江戸に居住するという幕藩体制下の大名のあり様を明瞭に示しているといえます。また、国許の墓所が滋賀県彦根市の清凉寺を基本とする状況は、井伊家が江戸時代を通じて一度の所替えもなかった故に生じた結果であり、譜代大名筆頭として幕府政治を支えた将軍家側近としての井伊家の特性に起因するものでしょう。

このように国史跡井伊家墓所は、江戸時代の幕藩体制や大名文化を知る上で欠くことのできない貴重な資産であると言えます。平成20年3月28日には、滋賀県彦根市の清凉寺、東近江市の永源寺、東京都世田谷区の豪徳寺の井伊家墓所が併せて国の史跡に指定されました。



井伊家墓所測量図



清凉寺十景図 (清凉寺)